

## 2 北方領土の産業

北方領土の周辺海域は、暖流（日本海流）と寒流（千島海流）が交わっていることから、豊かな水産資源に恵まれ、世界三大漁場の一つに数えられている所です。

また、国後、択捉両島の開けた原野では農業も営まれ、森林資源も豊かなことから林業も盛んだったといわれています。このように資源に恵まれ、一層の開発が期待されていた北方領土の産業の様子について調べてみましょう。

### （1）水産業

北方領土の水産業は、ニシン・タラ漁に始まり、第一次世界大戦後は、サケ・マス・カニ漁に発展していきました。その間、漁船、漁具、漁法の改良や、かん詰の製造技術の目ざましい進歩によって、開発が急速に進められたのです。

歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の沿岸には海藻や貝類も多く、島の人々は、これらの漁獲や加工に励みました。また、歯舞群島では大部分の人々が、コンブ漁に従事していました。

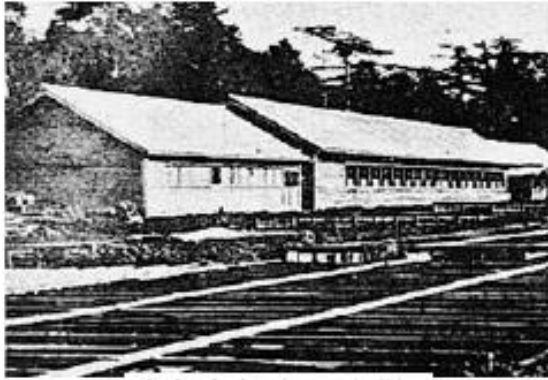
主な漁獲品は、サケ、マス、タラ、タラバガニ、花咲ガニ、クジラ、ナマコ、エビ、ホッキ貝、コンブ、ノリ、フノリ、ギンナンソウなどでした。これらはほとんどが、缶詰、塩蔵、乾そう品えんそうに加工されて、根室や函館かいそうに出荷され、国内での消費はもちろんのこと、海外にも多く輸出されました。中でも、コンブは根室から中国などへさかんに輸出されましたし、タラバガニの缶詰は、当時（戦前）から輸出缶詰の花形として重要でした。



択捉島のサケ・マス漁の様子（昭和初期頃）



千島列島の島では、日魯漁業（注）などの大資本の進出が活発になって、カニ漁、サケ・マス流し網漁業など沖合漁業の根拠地になり、盛漁期には出かせぎに來た労働者が、1万人を超え、大変賑わったといわれています。



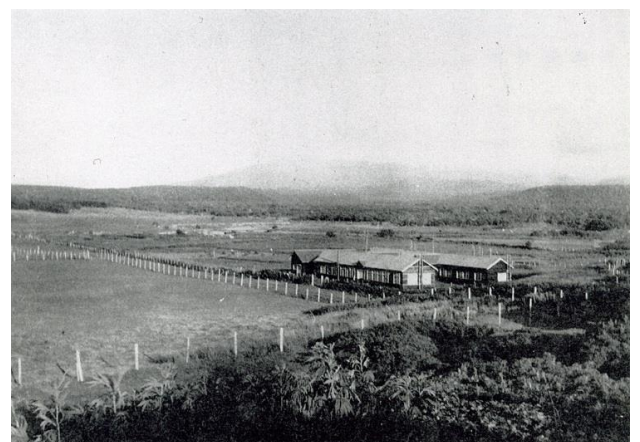
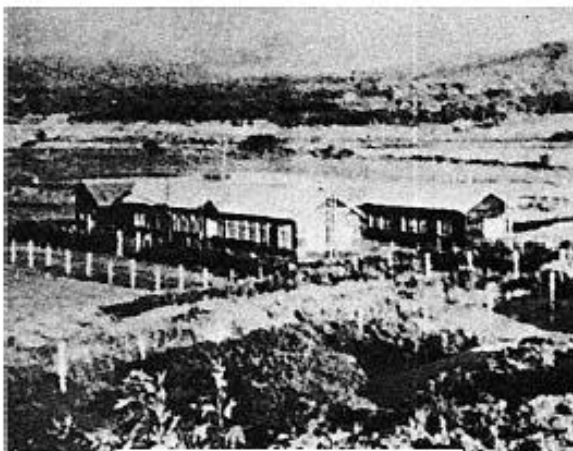
択捉島の心化場（昭和初期）

（注）日魯漁業とは、1914年（大正3年）に北洋漁業を行うために設立された株式会社で、  
本社は函館市に置かれました。現在はマルハニチロ株式会社となっています。

## （2）農・林・畜産業

北方領土の気候は、根室地方とほとんど変わりがないばかりか、ところによっては、温暖なところもあったので、農作物の栽培もある程度可能でした。しかし、当時（昭和10年～昭和14年頃）は、水産業に重点を置いていたので、専業農家は少なく、自家用の野菜を栽培する程度でした。

1939年（昭和14年）、北海道庁は千島調査所を設置し、北方領土及び千島列島の調査に乗り出しました。国後島と択捉島の調査結果によれば、食用作物では、大麦、小麦、豆类、ばれいしょ、大根、白菜、ほうれん草などができ、飼料作物では、えん麦、てんさい、とうもろこし、クローバー、チモシーなどができることがわかりました。



択捉島紗那の千島調査所（1939年（昭和14年）頃）



また、国後島と択捉島は、ともに森林資源の豊かな島です。山林のほとんどは国有林で、樹木の種類は、針葉樹であるトドマツ、エゾマツが主で、広葉樹では、ナラ、シラカンバ、イタヤ、ハンノキなどがありました。これらの木材の大部分は、原木のまま根室や函館方面に移出<sup>いしゆつ</sup>（注）されていましたが、一部は島内の工場でも製材され、建築材や魚箱材として利用されました。また、広葉樹類は主にまきとして燃料に使われました。



択捉島の国有林

（注）移出とは、貨物・産物を国内の他の地域へ送り出すこと。

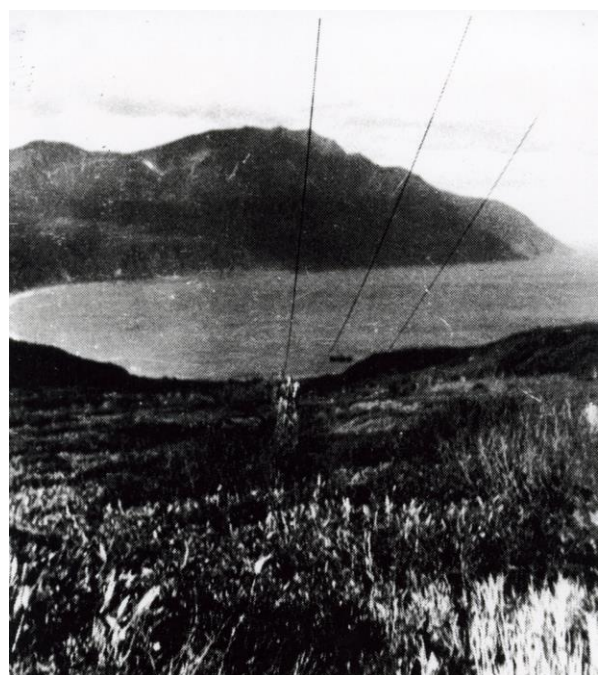
北方領土の気候や風土は、牧畜の経営に適していましたが、漁業の副業に馬を飼育する程度で、馬は運搬や船の巻き揚げに使われていました。ほとんどが天然放牧<sup>てんねんほうぼく</sup>で育成されることから、強健な馬が多く、年間およそ300頭の馬が、北海道や本州に移出されていました。

後にわずかながら、肉牛や羊が飼育されるようになりました。

また、歯舞群島<sup>はるかり</sup>の春刈島では、キツネの飼育が農林省の事業として行われていました。

### （3）鉱・工業

鉱業については、千島火山帯につらなる国後、択捉両島に、金、銀、銅、鉛、亜鉛、鉄、砂鉄、硫黄、硫化鉄などの地下資源があることは、調査の結果わかっていましたが、交通が不便なこと、生産費が高つくことなどの理由から、開発は進まず本格的な採掘は行われていませんでした。それでも、昭和に入ってからわずかながら生産していた鉱山には、択捉島の茂世路<sup>もよろ</sup>鉱山（硫黄）、国後島の千島<sup>ちしま</sup>鉱山（金、銀）、瀬石<sup>せせき</sup>鉱山（硫黄、硫化鉄）、東沸<sup>とうふつ</sup>鉱山（硫黄）などがありました。



択捉島、茂世路鉱山の鋼鉄線を望む（撮影年不明）

工業は、水産加工業と製材業が主なものであり、齒舞群島、色丹島、国後島、択捉島には、カニ、ホタテ貝、ホッキ貝、サケ、マス、クジラなどの缶詰工場や、コンブなどの海藻を原料とするヨードカリ（ヨウ化カリウム）の工場がありました。

また、国後島や択捉島には製材工場があつて、生産がさかんでした。

水力発電用のダムもつくられていましたが、川はいずれも小さく水量も少ないので、発電所は小規模なものでした。それでも9か所で発電が行われていました。



国後島の缶詰作業風景  
(1934年(昭和9年))



志免島しほつとろの缶詰工場作業風景（撮影年不明）